

接尾辞「たい」の意味分析

M 1 石黒利江子

1. はじめに

本稿では、「重い」と「重たい」に焦点をあて、従来なされていない接尾辞「たい」の明確な記述をすることを目的とする。

2. 先行研究の問題点

接尾辞「たい」に関する先行研究は、管見の限り丸山（1963）以外見当たらないが、丸山は古文における「たし」について触れるに留まり、十分な考察はしていない。本稿は現代日本語として扱うため、通時的な古文に遡ることはしないが、丸山の考察を検討する。

丸山は「たし」を意味的に二つに分類している。

いた（痛・甚）し - かたはらいたし / かた（固・難）し - ありがたし

したし / ねたし / おもだたし

うれたし / うしろめたし / こちたし / めでたし / また（全）し / らうたし

は語尾としての「たし」を認めることのできない語で、は「いたし」に基づくものであり、大言海の「痛し、甚しノ意ニテ接尾語の如ク用フル語」、大日本国語辞典の「接尾語の如く他の語につき、その事の甚しき意を表し、又其の意を強むる語」などの説を肯定せざるをえないとしている。既存の辞典（広辞苑）にも「たい」は「その事のはなはだしい意を表す」とされていることから、丸山の言うように「いたし」の「たし」であるという考えが一般的であろう。しかし、この意味説明だけでは以下の例ではどちらも可能ということになる。

（１）重い（？重たい）病気

「重たい病気」は「重い病気」より病気の程度が甚だしいとは考えづらい。追って調査やデータ収集が必要になると思われるが、上記の例を見ても、接尾辞「たい」の詳細な意味記述が必要であるといえる。

3. 「重い」と「重たい」

まず、「重い」と「重たい」の意味を、新明解国語辞典より引用する。

・「重い」・・・ そのものをささえ持つのに大きな力を必要とする・状態（感じ）だ。

「重い」物・で押さえられて（を持って）いるようで、のびのびとしない・様子（感じ）だ。

〔程度が〕はなはだしくて、容易ではない様子だ。

〔地位・身分などが〕高い。

・「重たい」・・・ 〔目方が〕重い。 重い感じだ。

以上のことから、「重い」は「何かしらの重量が大きいことを示（す）」しており、対象としては「重量のあるもの」（物理的・心理的なもの）である。

3.1 対象が目に見えるもの

（１）a. この岩は重い。100kg もあるらしい。

b. ?この岩は重たい。100kg もあるらしい。

例(1)でbはやや不自然である。その理由は、「100kgもあるらしい」という文が、客観的事実を述べているためである。しかし例(2)のように、感情を表す文が続くと、不自然ではなくなる。

- (2) a. ?この岩は重い。だから、持ちたくない。
b. この岩は重たい。だから、持ちたくない。

例(1b)(2b)から、「重たい」は、主観的(「岩」を持つ主体の意見に基づく)で、心理的なものを表していると考えられる。反対に例(1a)では「重い」が自然であったのに対し、(2a)では不自然になる。よって、「重い」は客観的事実(「岩」を持つ主体の意見は関係ない)を表し、「岩の重さが重い」という単なる陳述であることがわかる。つまり、例(1)(2)においては、岩を持つ主体の感情の有無が、「重い」と「重たい」を区別していると考えられる。

- (3) a. この岩は私にとっては「重い / 重たい」。
b. この岩は彼にとっては「重い / ? 重たい」。

例(3)において、bの「重たい」が不自然であるのは、岩の重さを感じているのが話し手ではないためである。これは、「重い」が「重たい」になった時、感情形容詞に近い性質を持つようになるからだ考える。

以上のことから、人称は話し手に制限されると言える。

3.2 対象が目に見えないもの

- (4) a. 彼の気持ちは重い。
b. 彼の気持ちは重たい。

例(4)で話し手が「花子」だとする。話し手である「花子」がa・bのように述べることは自然であるが、「花子」の話を聞いていた「太郎」は、aは言えてもbは言えない。これは3.1で検証したように、「たい」には人称制限があるため、「重たい」を用いることができるのは、例(4)の場合「彼」と関わりのある「花子」のみである。また、「たい」を付加することで、客観的事実を述べることができなくなり、単なる陳述を言うことはできないと考えられる。

3.3 まとめ

分析の結果「重い」と「重たい」の比較から、接尾辞「たい」は、人称制限があり、客観的事実が述べられない、つまり話し手のみの主観にもとづくと言える。また、接尾辞「たい」と形態的に同じ願望を表す助動詞「たい」も、話し手の主観にもとづき、人称制限があるため、両者は関連性があると考えられる。

4. 仮説

「眠い」と「眠たい」を例に、3節ではふれなかった観点からの分析をする。

- (5) a. 「眠い。寝かせて。」
b. 「眠たい。寝かせて。」

例(5) aとbは、両者とも自然で且つ正しい日本語である。この場合「眠い」と「眠たい」には、

どのような意味の差があるかを検討する。

3節で述べたように、接尾辞「たい」は願望を表す助動詞「たい」と関連があると考えられるため、(5a)より(5b)の方が願望を表しているように思われる。(5b)の「眠たい」は、願望であるからこそ、眠気がコントロール可能であり、(5a)の「眠い」は、事実であるから制御が困難であると言える。よって、(5a)のように述べると、相手の許可を待たずとも「寝る」という行動をとることができるが、(5b)のように述べると、眠気はあるがまだコントロール可能であること、もしくは「眠い」ことを察してほしい、という気持ちの表れになる。つまり、接尾辞「たい」を付加することで、婉曲に表現しているのではないかと考えられる。

4. 今後の課題

- ・「重い」と「重たい」を比較し分析したように、「眠い」と「眠たい」、「煙い」と「煙たい」も分析を行い、3.3の結果が妥当であるか検証する。
- ・接尾辞「たい」は婉曲表現ではないかという可能性の検証。
- ・「重い」においては、「重々しい」という畳語形容詞もあるため、派生形容詞と畳語形容詞についても考察して行きたい。

参考文献

丸山諒男(1963)。「形容詞の語尾「なし」・「たし」について」『大東文化大学紀要』1号

辞書

金田一京助・金田一春彦・見坊豪紀・柴田武・山田忠雄編『新明解国語辞典』三省堂